

## 論文

## 孫文『建国方略』における「東鎮」と吉林省松原市のアイデンティティ

柴田陽一・石田曜

## はじめに

2013年8月17日に筆者らは、吉林省松原市を初めて訪れた。京都大学の小島泰雄を代表とする科研「中国東北における地域構造の変化に関する地理学的調査研究」<sup>1</sup>のフィールド調査<sup>2</sup>のためであった。その時点で、松原市について筆者らが知っていたのは、長春市の北西180キロほどに位置し、人口は約290万人(2010年)、面積は約2.2万平方キロ、石油資源が豊富で吉林油田公司を中心として松花江の南北に市街地が形成された都市、といった程度のことであった。

そのため、翌日に松原市規画展覽館(2012年6月開館)を訪れ、まずは松原市の概要をつかむことにした。松花江の北岸に面する同館に到着すると、入口の前にそびえ立つ Monument が筆者らの目に飛び込んできた。表には次の文字が刻まれていた(図1)。

吾且名此铁路中区，“東鎮”。此東鎮当設立于嫩江与松花江合流处之西南，約距哈爾濱之西南偏一百英裏，将来必成為一最有利利益之位置。此之新鎮，不獨可為鐵路系統之中心，至当遼河、松花江間之運河成立後，且可成為水路交通之要地。

文字の左の地図は、「東鎮」という都市が9本の鉄道路線の交わる交通の一大結節点であることを示している(図1)。これはいったい誰の言葉なのだろうか。

その答えは、裏に回るとすぐに判明した。本誌読者には言うまでもないと思うが、この言葉は孫文の『建国方略』(1922年)の一節なのである(図2)。どうやら Monument のメッセージは、松原市はかつて孫文が水陸交通の結節点として可能性を見出していた「東鎮」の地である、ということのようなのである。

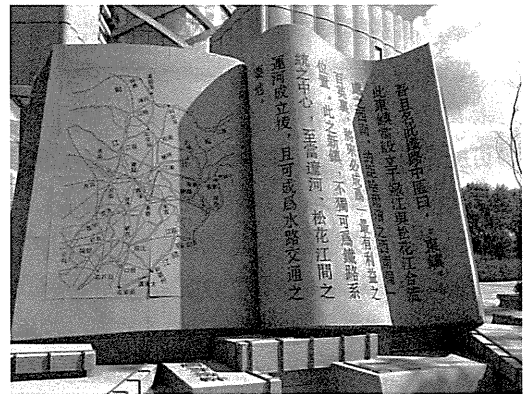


図1：松原市規画展覽館前の Monument (表)  
(2013年8月18日、柴田撮影)



図2：松原市規画展覧館前のモニュメント（裏）  
（2013年8月18日、柴田撮影）

しかし、ここでまた別の疑問が浮かんでくる。何々王朝の都が置かれた地であったというような例ならばいざしらず、松原市と同様に、孫文の『建国方略』で重要視されたことを、さも誇らしげにアピールしている例は他にあるのだろうか。たしかに、「東方大港」建設予定地であった浙江省嘉興市の乍浦港（嘉興港）<sup>3</sup>、「北方大港」建設予定地であった河北省唐山市の曹妃甸港<sup>4</sup>、三峡ダム（1993年着工、2009年完成）<sup>5</sup>の百度百科には、孫文の『建国方略』で重要視された地であったことが記述されてはいる。しかし、これらの地には、松原市と同様に大きなモニュメントが設置されているようには見えない。

では、松原市が孫文の「東鎮」構想をここまで押し出す理由は、いったいどこにあるのだろうか。松原市の歴史や地理と何かしら関係があるのだろうか。また、「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説（以下、「東鎮」言説と略す場合もある）はいつから現れるようにな

ったのだろうか。本稿は、こうした疑問を明らかにしようとするものである。

以下、第1章では、『建国方略』のテキストと民国期の地図において「東鎮」がどのように構想されていたのかを検討するとともに、孫文死後の国民政府における『建国方略』の位置づけを確認する。第2章では、『建国方略』以後の「東鎮」建設予定地が実際にどのような変貌を遂げたのか、また、松花江の南北に広がる現在の松原市中心部の市街地がどのように形成されたのかを検討することにより、「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説がどのような理由で、いつから現れるようになったのかを明らかにする。第3章では、松原市内で最大規模の発行部数を誇る『松原日報』紙の記事（2007年～2014年の8年間）を分析することにより、現在の松原市で「東鎮」と孫文に関する言説がどのような意味で用いられているのかを明らかにする。

このような「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説の生成過程と使用状況を検討することは、都市の現在および過去の表象にどのような地理的想像力が用いられるのかについて吟味することに他ならない。この点で示唆を与えてくれるのは、クラウディオ・ミンカによるトリエステの研究<sup>6</sup>である。ミンカによると、トリエステが自己を表象する際、イタリアという国家の周辺的存在としてではなく、「多文化的な中央ヨーロッパ都市そしてコスモポリタンなアドリア海中心都市としての理想的（理想化された）イメージ」に依拠する特徴があるという。したがって、トリエステにおいては、「非現前の地理（geographies of absence）」、すな

わち、「存在しえたが、一度も存在せず、将来も存在しないであろう何ものか」が、都市のアイデンティティの根幹を形成するものとして機能し続けてきたし、現在もしているのだと論じている。

しかし、トリエステと松原市の事例を同一のものともみなすことはやや早計であろう。トリエステのアイデンティティは、長い歴史の中で人々が抱いてきた漠然としたイメージの総体であると考えられる。換言すれば、さまざまな主体によって何度も構築と再編を繰り返してきたものであり、集団によって創り上げられたイメージと言ってよいだろう。それに対し、松原市の「東鎮」は、孫文という特定の個人が特定の年代に抱いたイメージであり、明確かつ単一の起源を持つものである。したがって、両都市にとって「非現前」の意味するところは、本質的には異なるものと考えられる。この点に十分注意を払いつつも、本稿の最終章では、ミンカの研究を参考にして松原市のアイデンティティと孫文の「東鎮」構想との関係を考察するにしたい。

## 1 孫文『建国方略』における「東鎮」

本章では、第1節と第2節で、『建国方略』のテキストと地図において、「東鎮」がどのように記され、どのような位置づけを与えられていたのかをそれぞれ検討する。続いて第3節では、孫文死後の国民政府における『建国方略』の位置づけを確認する。

### (1) テキスト

1922年に刊行された孫文の『建国方略』は、「心理建設」、「物質建設」、「社会建設」の3部から成る著作で、それぞれの部に対応した『孫文学説』（1919年5月初版）、『実業計画』（1921年10月初版）、『民権初歩』（1917年4月初版）という3冊の単行本を合本したものである<sup>7</sup>。

上述のモニュメントに刻まれた言葉は、『建国方略』のうち、「改革開放」以降に中国の経済開発を提言していた書として注目を集めている、『実業計画』（*The International Development of China*）の一節である<sup>8</sup>。武上真理子によると、同書は孫文が構想した「鉄道・港湾・河川を連関させた交通網を軸に、商・工・鉱・農業などの総合的な発展を目指す一大プロジェクト」の具体案を記した企画書とみなすことのできるものであるという<sup>9</sup>。序文と結論を除くと、第一計画～第六計画についてそれぞれ説明した6つの部分から構成されている。

第一計画は、河北省唐山市への「北方大港」建設と、それを基点とする鉄道整備（「西北鉄路系統」）などをその内容としている<sup>10</sup>。第二計画は、主として上海港に代わる新港として「東方大港」を建設するとともに、長江流域の南京・鎮江・蕪湖・武漢などの諸都市を発展させようとするものである<sup>11</sup>。第三計画は、広東省広州市に「南方大港」を建設し、それを基点とした鉄道整備（「西南鉄路系統」）などについて説明している<sup>12</sup>。第四計画は、全長10万マイルにも及ぶ中国全土の鉄道網建設計画を内容とするものである。「中央鉄路系統」（長江北部、蒙古・新疆の一部をカバー）、「東南鉄路系統」（長江南部のうち、重慶より東をカバー）、「東北鉄路

系統」(満洲全体と、蒙古、直隸の一部をカバー)、「拡張西北鉄路系統」(蒙古、新疆、甘肅の一部をカバー)、「高原鉄路系統」(西藏、青海、新疆の一部、甘肅、四川、雲南をカバー)という、5つの路線系統が構想されていた<sup>13</sup>。第五計画は、第四計画までの重工業ではなく、食糧・衣服・建築・交通・印刷工業について述べられている<sup>14</sup>。第六計画は、鉄鋼・石炭・石油・銅などの資源に関するものである<sup>15</sup>。

こうした内容が含まれる『実業計画』のうち、上述の言葉は第四計画の「東北鉄路系統」の冒頭部分に登場する<sup>16</sup>。以下では、9000マイルに及ぶ同系統の整備計画の中で、「東鎮」がどのような位置づけを与えられているのかについて確認しておきたい。

孫文によると、かつて中国東北部(満洲)は広々とした荒野と同じように考えられていたが、中東鉄路建設以降は中国で最も肥沃な地域と認識されるようになった。なぜなら、タンパク質に富み肉の代用品となる大豆の一大生産地であるばかりでなく、森林や鉱産資源も豊富であるためである。中国東北部にはすでに京奉線(北京と奉天を結ぶ)・南満洲鉄道・東清鉄道という3本の幹線鉄道があるが、さらなる発展のために一つの網状の鉄道を敷設すべきである。すなわち、鉄道路線の中心地区を新たに建設し、なおかつクモの巣のように鉄道網を張り巡らせることである。この中心地区こそ「東鎮」であり、嫩江と松花江の合流地点の南西、ハルビンの南西約100マイルに位置し、将来必ずや最も利益を生む場所の一つとなる(図3)。さらに、単に鉄道路線の中心地区としてだけではなく、遼河と松花江の間に運河が完成した暁

には、水陸交通の要衝となるという<sup>17</sup>。

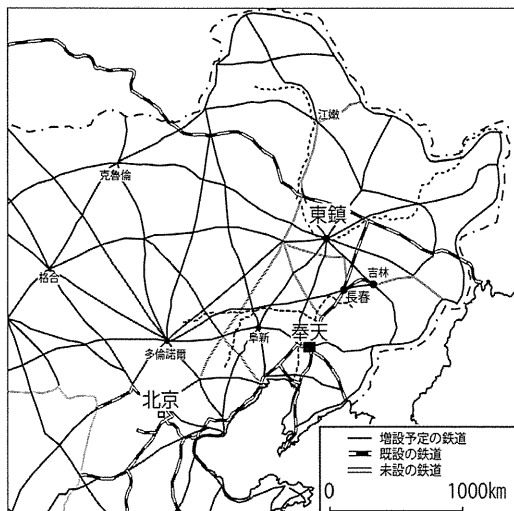


図3:「東鎮」の位置と増設予定の鉄道(『実業計画』の付図「中国鉄路全図」に基づき石田作成)

これに続いて、孫文は20本の鉄道路線の増設を立案した。そのうち9本が「東鎮」を基点とし、四方八方に伸びる路線である(図3)。第一線は満鉄と平行して南に伸びる「東鎮葫芦島線」である。第二線から第九線は、時計回りの順に「東鎮北方大港線」、「東鎮多倫線」、「東鎮克魯倫線」、「東鎮漠河線」、「東鎮科爾芬線」、「東鎮饒河線」、「東鎮延吉線」、「東鎮長白線」であった<sup>18</sup>。

ところで、孫文は「東鎮」命名の理由について何も記していない。ただ、『実業計画』の第一計画を見ると、彼が蒙古・新疆・青海など西北部への大規模な移植民(10年内に1000万人)を計画していたことが判明する<sup>19</sup>。また、中国全土を描いた地図を見ると、嫩江と松花江の合流地点の南西、ハルビンの南西約100マイル

という「東鎮」の位置は東北部のほぼ中心に当たることが判明する。こうしたことから、彼は中国の中央部から見て、西の西北部と東の東北部をセットで捉えており、東の中心都市という意味で「東鎮」と命名したのではないかと推測される。

以上のように、1922年に刊行された『建国方略』（『実業計画』は1921年刊行）において、孫文は中国東北部のほぼ中心に位置し、より具体的には嫩江と松花江の合流地点の南西に位置する「東鎮」を、鉄道交通および河川交通の一大結節点として将来発展が見込まれる地である、と評価していたのである。

## (2) 地図

『実業計画』の付図「中国鉄路全図」では、嫩江の南岸に「東鎮」が描かれていることを確認できる。ただし、嫩江と合流するよりも上流の松花江（いわゆる第二松花江）が描かれていないため、合流地点の位置は特定できない。また、同じく嫩江の南岸に伯都訥という都市が描かれ、「東鎮」とは区別されていることにも注目しておきたい。伯都訥は、松原市寧江区の前身である扶余の旧称である<sup>20</sup>。扶余鎮は松花江の北岸に位置し、南岸の前郭鎮（前郭爾羅斯（ゴルロス）の略称）とともに松原市中心部を構成している。同じく嫩江の南岸ではあるものの、扶余（伯都訥）から見て北西の位置に、別の都市として「東鎮」が建設されることになっていたのである。

次に、1929年7月刊行の『表解説明 中華析類分省図』<sup>21</sup>に収められた「全国鉄路図 附中山計画図」（図4）を見てみよう。この地図

帳は、孫文の『実業計画』の具体化が図られた南京国民政府成立後に作成されたものである。その証拠に、表紙裏には孫文の肖像とともに「総理実業計画大綱」が印刷されている。図4は既設の鉄道に加えて、『実業計画』に示された計画路線が実線と点線で描かれているという特徴がある。図4の附表である「中山鉄路計画表」には、各系統・路線の名称と距離が示されている。9本の鉄道が交差する「東鎮」は、テキストどおり、嫩江と松花江の合流地点の南西に描かれているように見える。一方、中国全土を対象とする地図であるためか、扶余（伯都訥）は描かれておらず、この地図から扶余と「東鎮」の位置関係を理解することはできない。

以上のように、2種類の地図から読み取れる情報は多くはないが、嫩江と松花江の合流地点の南西、且つ扶余（伯都訥）の北西に位置するのが、「東鎮」という新たに建設される交通の一大結節点であったことが分かる。



図4：全国鉄路図 附中山計画図（歐陽纓編『表解説明 中華析類分省図』亜新地学社、1929年7月）

### (3) 孫文死後の『建国方略』の位置づけ

1925年2月の「国事遺囑」において、孫文は次のように述べ、『建国方略』を彼の死後も国家建設を進めるうえで依拠すべきテキストの一つと位置づけた。

現在、革命なお未だ成功せず。およそ我が同志は、必ず余の著せる建国方略、建国大綱、

三民主義、および第一次全国代表大会宣言に依拠して努力を継続し、もって貫徹を求むべし<sup>22</sup>。

また、井内弘文によると、「北伐」が完了して全国統一を達成した1928年に、孫文の『実業計画』は、次のような形で具体化が図られたという。

彼の息子孫科の「建設大綱草案」として、計画年限や大体の予算を見積った、より具体的な形式を以て示された〔中略〕孫科の計画は交通部長としての当時の彼の置位にもとづいて交通の開発、特に鉄道・公路の開発に重点がおかれ、総予算二百五十億元のうち二百億元、つまり予算の八割が鉄道・公路の建設にあてられている<sup>23</sup>。

ただし、孫文の計画とほとんど同一内容である孫科の計画は、実行可能性に乏しいものであったようである。「孫文案の具体的内容がデスク・プランにすぎない、しかも膨大にすぎたものであつたから、これをそのまま予算化したところで到底実行できるものでなかつた」と、井内は評価している<sup>24</sup>。

国民政府によるその後の経済建設においても、孫文の『実業計画』がそのままの形で実現されたというより、現実合致するように内容形式を変更した部分的な計画として現れたと見るほうが妥当である。とはいえ、「孫文の膨大な理想案はこのような部分的な個々の実践的計画をつらぬいてその底流をなしているところの国民党の経済建設思想ともいうべき役割を果していた」と、井内は強調している<sup>25</sup>。

以上のように、「国事遺囑」およびその後の経済建設の過程を見る限り、孫文死後も国民政府は『実業計画』の具体化を重要政策の一つとして位置づけていたと見ることができよう。

## 2 『建国方略』以後の「東鎮」と松原市誕生 —「東鎮」言説をめぐって—

本章では、第1節で、『建国方略』以後の「東鎮」建設予定地が実際にどのような変貌を遂げたのかを検討する。続く第2節で、松花江の南北に広がる現在の松原市中心部の市街地、すなわち、扶余鎮と前郭鎮がどのように形成されたのかを検討する。第3節では、1992年6月の松原市誕生に伴って、名称と行政界がどのように変化したのかについて検討する。第4節では、「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説がどのような理由で、いつから出現し始めたかについて検討する。

### (1) 『建国方略』以後の「東鎮」

水陸交通の一大結節点とみなされた「東鎮」の建設予定地には、現在まで大きな都市が形成されたことは一度もない。建設予定地であつたはずの嫩江と松花江の合流地点の南西の衛星写真を見ても、現在そこには小さな集落が点在するのみであり、松原市中心部と同等、ないしはそれよりも大きな都市の存在や痕跡を確認することはできない。

また、『建国方略』で構想されたクモの巣状の鉄道網は、実際に建設されることはなかつた。現在の松原市は、长春市と吉林省白城市を結ぶ全長約330キロの長白線が通過しているものの、鉄道路線の結節点とはなっていない。しかも、現在ようやく複線化工事が行われている長白線は、1935年に京白線(新京と白城子を結ぶ)として竣工したが、1946年にいったん取り壊された。その後、1958年に再び建設が始まり、

1972年に全線開通した<sup>26</sup>。こうした事実からも分かるように、長白線は決して重要性の高い路線ではない。

このように、孫文が構想した「東鎮」は実際に建設されることはなく、それを基点とする鉄道網も整備されることはなかった。もちろん、孫文のプランが実現可能性のない空想的なものであったことに、その原因を求めることはできよう。『実業計画』は「非常に限定された資料をもとに素人が検討して描き上げた概略図であり、政策概案にすぎない」ものであると、孫文自身が述べているからである<sup>27</sup>。しかしながら、『実業計画』の具体化に取り組み始めた矢先、中国東北部に「満洲国」が建国されたことも、同様に重要な原因であろう。言うまでもなく、それ以後の中国東北部は国民政府の力が及ばない地域になってしまったからである。こうして孫文の「東鎮」構想は架空の計画に終わったのである。

## (2) 扶余と前郭の都市形成と「東鎮」

続いて、現在の松原市中心部を構成する扶余鎮と前郭鎮の市街地が、どのように形成されたのかについて検討しよう。

松花江の北岸に位置する扶余（旧称は伯都訥）は、松花江水運の拠点として発展してきた。1933年製版の地形図（図5）を見ると、県城の南西に錨マークが描かれており、河港の存在を確認できる。また、県城の南東には渡船場も見られる（図6）。1935年には、南岸に京白線が敷設され、前郭旗駅（現在の松原駅）が設けられた。1939年に前郭旗駅で降車して扶余を訪れた画家で民俗学者でもあった染木煦は、次

のように述べている。

前郭旗に着く。郭爾羅斯前旗の略称であつて扶余の為に設置された駅である。此処から城内に至るには松花江を距て、約六軒の道程がある。馬車で一時間、松花江岸に出で、折から出発しか、つてゐた警察隊の船に飛び乗つて了つた。〔中略〕今の新城子〔扶余一筆者注〕は人口七万、完全な漢人都市で四方に城壁をめぐらした典型的な地方都市である<sup>28</sup>。

当時の前郭旗駅はあくまで「扶余の為に設置された」ものであり、駅付近には都市的な集落は見られなかったが、その後しだいに都市化が進んでいく。ところが、1930年代以降も松花江の両岸にある扶余と前郭を行き来する手段は、しばらくは渡し船のままであった。この状況を一変させたのが1973年9月の松花江大橋の完成であり<sup>29</sup>、それ以降は扶余と前郭の一体化が加速度的に進むことになったと見られる。

この背景としては、1959年に初めて石油探掘に成功し、1961年に吉林省管理下の国有企業として発足した吉林油田の存在が重要である。小野寺淳によると、早いものだと1960年代から1970年代にかけての時期に、吉林油田の従業員とその家族のための住宅小区が、扶余県城の北部と前郭鎮の西部にそれぞれ建設されたという<sup>30</sup>。したがって、松花江の南北に広がる吉林油田の住宅小区や関連施設の行き来を容易にするためにも、松花江にいち早く橋を架ける必要があったと考えられるのである。



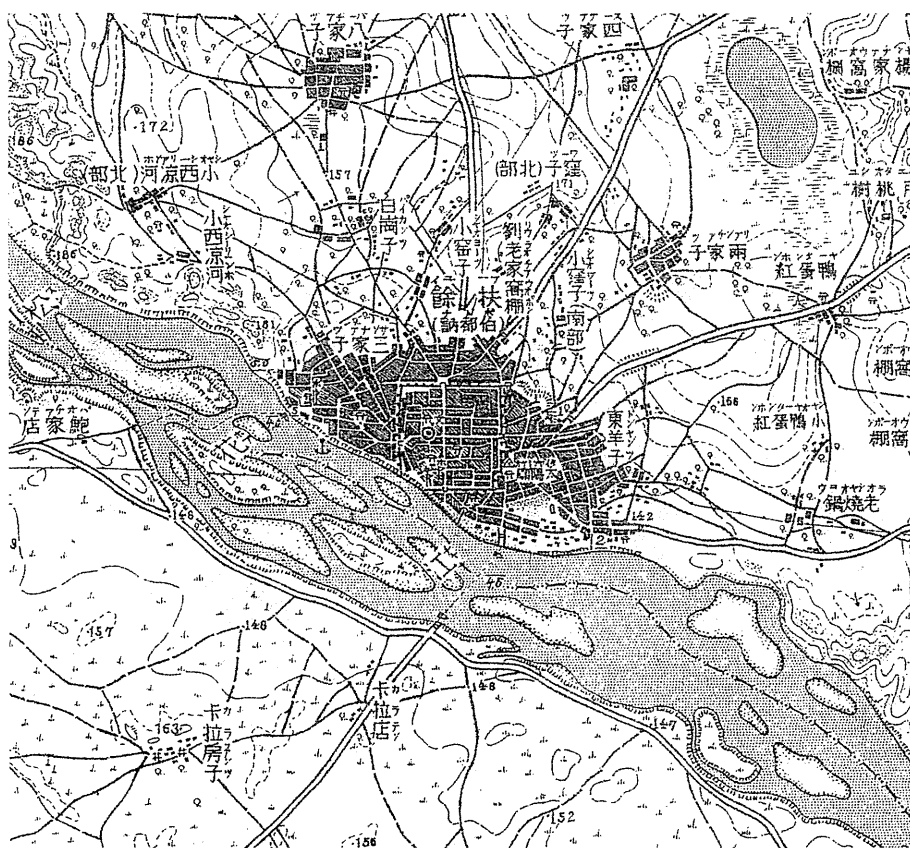


図5：1933年の扶余付近（満洲十万分一図伯都納五号 茂興站、大日本帝国陸地測量部、1933年1月発行）



図6：松花江岸の渡船場（染木煦『北満民具採訪手記』座右宝刊行会、1941年、274頁）

このように、『建国方略』以後の時期における扶余と前郭の歴史は、松花江の北岸と南岸に位置する2つの都市が、しだいに一体化していく過程とみなしてよいだろう。もっとも1992年の松原市誕生までは、次に述べるように、扶余と前郭はあくまで別の行政体として歩んできた。

北岸の扶余は1914年から吉林省扶余県、1987年からは吉林省白城地区扶余市（県級市）の中心都市であった。それに対し、南岸の前郭はもともとジェリム（哲理木）盟（中心は現在の内モンゴル自治区通遼市）に属し、北岸の扶余とは異なるモンゴル族を中心とする空間であった。ところが、「満洲国」が建国されると、前郭は一転して吉林省に含まれることになる。上述の京白線が敷設されたのは、正にこの時期に当たる。人民共和国成立後の1955年には、前郭爾羅斯モンゴル族自治州が置かれ、前郭鎮はその県都となっていた。

では、扶余と前郭において、「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説が使用されることはあったのであろうか。答えは否である。『扶余県文物志』（1982年）、『吉林省扶余県地名志』（1984年）、『前郭爾羅斯蒙古族自治州地名志』（1989年）、『駿馬奔馳 前郭文史資料第9輯』（1991年）、『前郭爾羅斯蒙古族自治州志』（1993年）、『扶余県志』（1993年）などの地方志類<sup>31</sup>、さらには地名詞典<sup>32</sup>にも当たってみたが、使用例を確認することはできなかった。その理由は次のように説明できるだろう。

すなわち、松花江の北岸（嫩江と松花江の合流地点の南東）に位置する扶余では、孫文が構

想した「東鎮」の建設予定地（合流地点の南西）と地理的位置が異なるため、「東鎮」言説を使用するには無理があった。一方、松花江の南岸（合流地点の南西）に位置する前郭では、地理的位置は「東鎮」の建設予定地と符合するものの、モンゴル族自治州である前郭が、異民族の支配者による架空の計画を持ち出して自らのアイデンティティを語る必要はなかろう<sup>33</sup>。こうして「東鎮」言説は松原市誕生までは使用されることはなかったのである。

### (3) 松原市誕生と行政界の変更

1992年6月に地級市である松原市が誕生した。現在は1市区（寧江区）、1県級市（扶余市）、2県（長嶺県、乾安県）、1自治県（前郭爾羅斯モンゴル族自治州）を管轄している（図7）。松原市誕生により、扶余と前郭の名称および行政界はどのように変化したのだろうか。

まずは、名称の変化である。扶余市（1987年に設置、旧扶余県）は松原市誕生に伴って扶余区に改称されるが、1995年にはその西部の扶余鎮（県城）付近を切り離して寧江区が設置され、東部は改めて扶余県（現在の扶余市）と呼ばれるようになった。それに対し、前郭爾羅斯モンゴル族自治州（1955年に設置）は松原市誕生後も名称に変化はなかった。

次に、行政界の変化として重要なのは次の2点である。一つは、松花江の南北に位置し、松原市誕生までは別の行政体であった扶余と前郭が、松原市という一体の空間になったことである。前節で述べたように、扶余と前郭の一体化は以前から進められてきたわけであるが、松原市誕生を契機にそれがようやく実現されたので

ある(図7)。

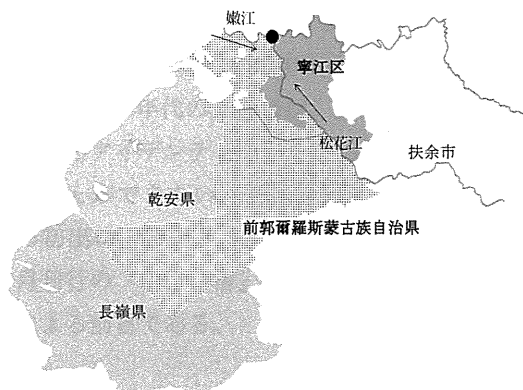


図7:現在の松原市行政区と嫩江・松花江の合流地点(柴田・石田作成) ●は嫩江と松花江の合流地点を指す。

いま一つは、松花江北岸の扶余鎮を中心として設置された寧江区が、南岸の前郭鎮の西部を編入したことである(図8)。その理由は、松花江の南北に広がる吉林油田関連の施設を寧江区内に取り込み、新たに寧江区に編入する松花江南岸に松原市の行政の中心を置くためであった。図8が示すように、寧江区政府が松花江北岸の扶余に置かれているのに対し、松原市政府は、1992年時点ではまだ市街地化されていなかった松花江南岸の寧江区に置かれている。現在の松原市には、上述の松花江大橋(通称「一橋」)に加えて、その東に松原大橋(2009年11月竣工、通称「二橋」)、さらに東に龍華大橋(2008年6月、通称「三橋」)という計3本の橋が架けられ、松花江南北の交通をより便利なものになっている。こうして松原市誕生により、松花江の南北にまたがる寧江区という空間が出現したことは、松花江の南北を一体の空間と捉える認識を高めることになったと考えられ

る。

このように、1992年6月の松原市誕生により、松花江の南北は一体の空間となり、また、そのように認識されるようになった。このことが、松原市において孫文の「東鎮」言説が出現する契機となった。「東鎮」建設予定地は嫩江と松花江の合流地点の南西とされたため、松原市誕生以前は前郭でしか使用できる可能性がなかった。しかし、松原市誕生に伴って南北一体の空間が出現したことにより、市全体として「東鎮」にアイデンティティを求めることが可能となる地理的条件が整ったのである。

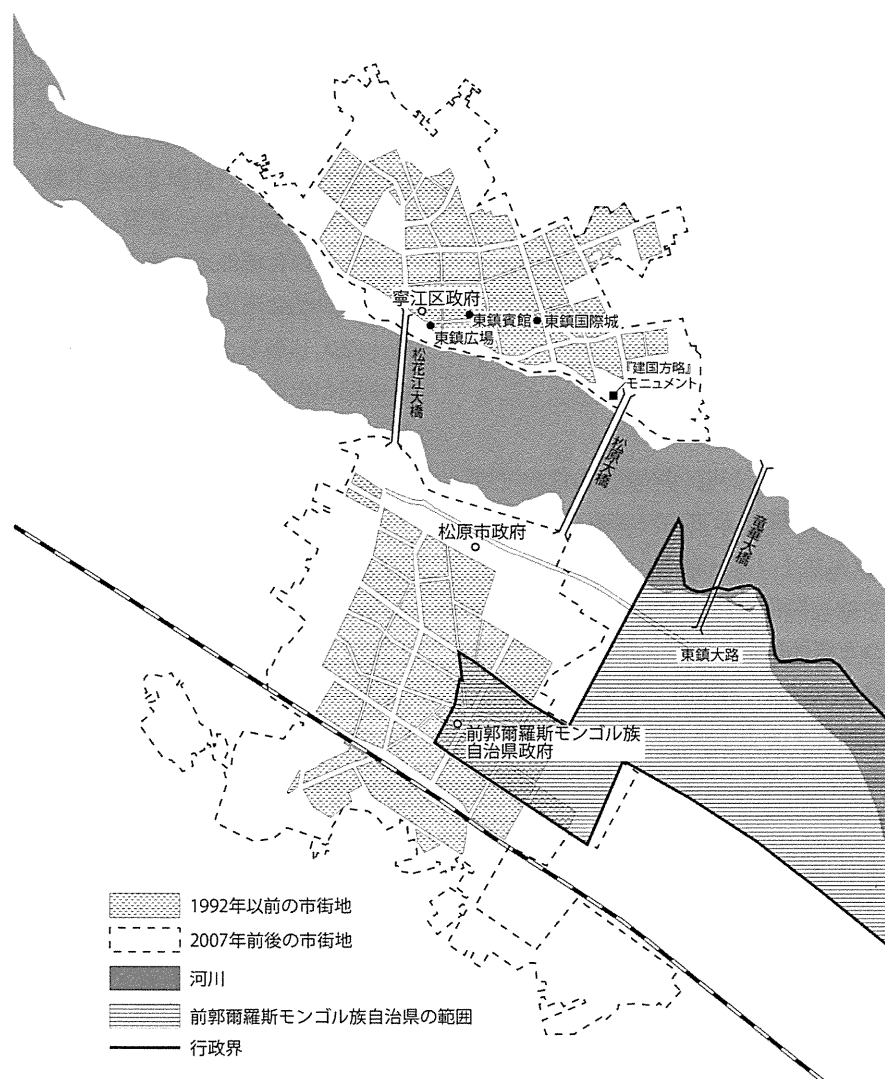


図8：松原市の中心市街地（石田作成）

## (4) 「東鎮」言説の出現とその理由

地理的条件が整ったにもかかわらず、『松原年鑑』（1996年・1999年）<sup>34</sup>や地名詞典<sup>35</sup>などの1990年代の文献には、孫文の「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説を確認することができない。管見の限り、「東鎮」言説の初出は、市誕生10周年に当たる2002年6月刊行の『松原市情』に付された編者の劉秉生による前言である。

十年前の七月一日、借助小平同志南巡談話の浩蕩東風，松嫩平原上的新興城市——松原市宣告誕生。松原市の誕生，標誌着偉大的革命先行者孫中山先生關於在松嫩兩江匯合處設立東鎮市（即今松原市）的宏偉構想變成現實，標誌着省委關於建設吉林省第二座石油化工城和吉林省西部中心城市的戰略設想付諸實施，標誌着松原的開發與建設、改革與發展揭開了新的篇章。（十年前の七月一日、鄧小平同志の南巡講話の雄大な東風の助けを借りて、松嫩平原上の新興都市——松原市は誕生を宣した。松原市の誕生は、偉大なる革命の先駆者である孫中山先生による、松花江と嫩江の両河川の合流地点に東鎮市（すなわち、現在の松原市）を創設するという壮大な構想が現実となったことを示すものであり、吉林省で二つ目の石油化学工業都市と吉林省西部の中心都市建設に関する中国共産党吉林省委員会の戦略構想が実行に移されたことを示すものであり、松原の開発と建設、改革と発展に新たなページが開かれたことを示すもので

ある。）<sup>36</sup>

1992年6月の松原市誕生は孫文の「東鎮」構想が現実になったものである、というこの前言で示された見方は、それ以降の文献でも継承されることになる。また、「東鎮」の位置が嫩江と松花江の合流地点であることには言及するものの、『建国方略』のテキストどおり合流地点の南西であるとは記されていないことにも注目しておきたい。市誕生10周年に当たる2002年に、なぜ「東鎮」言説が出現し始めたのかは後に検討することにし、まずは、その後の使用例を確認しておきたい。

2006年刊行の『松原市志』の序言では、市長の孫鴻志（1965年生まれ。2006年3月～12月：松原市委副書記兼代市長、2006年12月～2010年12月：松原市委副書記兼市長）<sup>37</sup>が次のように述べている。

由於這裏地理位置的重要和水土礦產資源的豐饒，孫中山先生在《建国方略》中曾設想要在這裏建設一座塞北重鎮，擬名“東鎮”。經歷了歷史的風風雨雨，到中國進入社會主義建設新時期，孫中山先生的設想終於變成現實。一九九二年，在改革進一步深化的東風沐浴下，松原市應運而生！（ここの地理的な位置の重要性と、氣候風土や鉱産資源の豊かさから、かつて孫中山先生は『建国方略』の中で、この地に塞北の要衝としての都市を建設することが必要であると構想し、「東鎮」という名を考えた。歴史の様々な困難を乗り越えて、中国が社会主義建設の新時期に入った

時、孫中山先生の構想がついに現実となった。1992年、改革が一層進んだ東風を浴びつつ、松原市はその気運に乗じて誕生した！）<sup>38</sup>

この序言でも、『松原市情』と同じく、松原市誕生を孫文の「東鎮」構想が現実が変わったものであると位置づけている。ただし、「地理的位置の重要性と、気候風土や鉱産資源の豊かさから」、松原市の地に孫文が「東鎮」を建設すべきだと構想したという記述からは、『松原市史』の方が、『松原市情』よりも具体的に松原市の輝かしい過去を語ろうとしていることを示している。一方で、嫩江と松花江の合流地点という「東鎮」の位置については、序言ではまったく触れられていない。

2011年刊行の都市地図に付された紹介文は、次のように述べている。

20世紀初、偉大的革命先行者孫中山先生在《建国方略》中提出，要在松花江和嫩江交匯處建設一座交通中樞城市“東鎮”，就是現在的松原。（20世紀の初頭、偉大なる革命の先駆者である孫中山先生が『建国方略』の中で、松花江と嫩江の合流点に交通の中樞となる都市「東鎮」を建設すべきであると述べた。それが現在の松原なのである。）<sup>39</sup>

この紹介文でも、松原市が孫文の「東鎮」構想が現実になったものだとする位置づけは変わらない。また、「東鎮」の位置が嫩江と松花江の合流地点であるという記述は見られるものの、『松原市情』と同じく、合流地点の南西である

とは述べられていない。

市誕生20周年に当たる2012年に開館した松原市規画展覽館前に設置されたモニュメントについては、本稿冒頭で紹介したとおりだが、そこには『建国方略』のテキストがそのまま刻まれており、「東鎮」の位置が嫩江と松花江の合流地点の南西であることが明示されている。

こうした使用例のほかにも、現在の松原市の市街地に「東鎮」を冠した道路や施設が見られることも注目に値しよう（図8）。松花江南岸の市街地（寧江区）を東西に貫く「東鎮大路」、松花江北岸の市街地（寧江区、旧扶余）に位置する「東鎮広場」、「東鎮国際城」（大規模商業施設兼住宅施設）<sup>40</sup>、「東鎮賓館」（ホテル）がそれに該当する。さらに、インターネット上でのニュースサイトにも、「東鎮網」<sup>41</sup>という名前が付けられている。

このように、2002年6月の『松原市情』以降、孫文の「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説がひろく見られるようになったわけであるが、市誕生10周年に当たるこの時期に突如として「東鎮」言説が出現し始めたのであろうか。

ここで注目されるのは、作家である張笑天の著書『心霊駅』（2004年1月）に収録されている「孫中山先生失落的夢」という文章である<sup>42</sup>。張によると、松原市市長の高広濱（1963年生まれ。2000年12月～2001年2月：松原市委副書記兼副市長兼代市長、2001年2月～2003年4月：松原市委副書記兼市長）<sup>43</sup>および松原市委書記の楊紹明（1949年生まれ。2001年12月～2006年1月：松原市委書記）<sup>44</sup>と食事を共にした時、高市長が少し前に孫文の故

居（広東省中山市）を訪れ、そばにあるテレビドラマ『孫中山』（辛亥革命90周年に当たる2001年に中央電子台で20回にわたって放送、各回45分、趙文瑄主演）<sup>45</sup>撮影のために建てられた中山影視城（中山城、中央電子台中山基地とも呼ばれる）<sup>46</sup>も見学したことに、ふと言及したという。彼らが食事を共にした時期は、経歴ならびに文章中の「10年前ここに松原市が新しく作られた」という記述から判断して、2002年だと考えられる。

ところで、中国語版ウィキペディア（中文維基百科）の「松原市」の項目には、次のような記述がある。

建于1992年，但後來在2001年中央電視台為孫中山先生制作紀念節目的時候，纔發現早在建市的70年前，孫中山在《建国方略·實業計畫》中提出在這里建立名為“東鎮”的東北鐵路中樞，以帶動東北的發展，可惜他的理想在當時沒有實現。（1992年に建設されたが、しかし後の2001年、中央電視台が孫中山先生の記念番組を制作した時ようやく、早くも70年前に孫中山が『建国方略・實業計畫』の中で、この地に「東鎮」という名の東北鉄道の中樞を築き、以て東北の発展へと連動させることを打ち出したが、残念ながら彼の理想は当時実現するには至らなかった。）<sup>47</sup>

つまり、中央電子台が制作した2001年の孫文の記念番組、つまり、テレビドラマ『孫中山』が、孫文の『建国方略』に記された「東鎮」を「発

見」する契機となったというのである。この記述に従うならば、いや従わずとも、時間の順序から考えて、高市長らはテレビドラマに刺激を受けて孫文やその「東鎮」構想に関する理解を深めるべく、孫文故居や中山影視城を訪問したと考える方が自然であろう。

再び張の文章に戻ると、高市長と楊市委書記から聞いた話として、次のような興味深い記述がある。すなわち、松原市が設立された位置はまさしく孫文による「東鎮」の青写真のとおりだが、残念なのは、市設立当初は誰も孫文の著作をちゃんと調べていなかったことである。さもなくば、どうしてありきたりで変化に乏しい「松原」という名前を付けたであろうか。もし「東鎮」と称していたならば、革命の先駆者である孫文の予言に應えることになり、間違いなく有名になっていただろう。地名は一つの記号に過ぎないが、あるものはとどろき、あるものはありふれていてつまらない。したがって、孫文が私たちのために付けてくれた「東鎮」という、それ自体がブランドであり、将来への展望と高い識見を有する地名を使用しないことは、きわめて残念である、と市の名称を「松原」としたことを彼らが悔やんでいるというのである。

したがって、1990年代の文献に「東鎮」言説が出現しなかった理由は、1992年の市設立当初は孫文の『建国方略』に記された「東鎮」についてほとんど知られていなかったためであると判断されよう。また、テレビドラマ『孫中山』や孫文故居と中山影視城への訪問によって、「東鎮」と松原市の位置とが一致することを高市長らがようやくしっかりと認識したとみなすことができよう。要するに、市誕生10周年に当た

る2002年6月の『松原市情』の前言に「東鎮」言説が初めて出現した理由は、1992年の松原市誕生により松花江の南北が一体の空間になったという地理的条件に加えて、2000年代になってようやく、高市長ら松原市の幹部たちが孫文の『建国方略』の価値を認識したためであると説明できるのである。

なお、市名を「松原」から「東鎮」へと変更すべきという提案の背景には、有名になりたいという理由以外に、経済的理由も垣間見ることができる。張の文章には、「東鎮」へと市名を変更して経済を急成長させることが、孫文の構想した「東鎮」の夢をかなえることになる、と高市長らが考えているように受け取れる記述がある。また、インターネットに公開されている「松原市地産分析報告」<sup>48</sup>という文章には、2002年以降、市政府が主導する形で、不動産開発が今までにないほど活発になったとある。中国において土地はあくまで国のものであるが、市政府は不動産開発を行えば、それを販売して収入を得ることができる。財政が逼迫しがちな地方都市にとって、この収入が重要な位置を占めていることは言うまでもない。

したがって、2002年以降に「東鎮」言説が使用されるようになったもう一つの理由は、市政府が不動産販売を行う際に、孫文の『建国方略』で重要視された地であるというお墨付きが必要だったためではないかと考えられる。高市長が退任後、通化市委書記(2003年4月～2007年3月)を経て、2007年3月から長春市委書記(5月からは吉林省常委を兼任)へと昇進していることも、このことを裏付けているのではなかろうか。つまり、松原市市長在任

時に不動産開発と販売で実績を上げ、それが高く評価されたがゆえの昇進だったと考えられはしないだろうか。ただ、これについてはあくまで推測の域を出ない。

以上のように、孫文の「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説は、市誕生10周年に当たる2002年以降に出現するようになった。その前提としては、松原市誕生により「東鎮」建設予定地と松原市の範囲が一致したことが何よりも重要である。とはいえ、テレビドラマと孫文故居と中山影視城への訪問によって、松原市の幹部たちが「東鎮」と松原市の位置とが一致することを認識したことが直接の契機であると考えられる。

その後の「東鎮」言説は、松原市誕生を孫文の「東鎮」構想が現実になったものと位置づけ、松原市の発展(の可能性)を孫文がすでに見抜いていたとするものが多い。また、地理的位置に関しては、『建国方略』のテキストどおり嫩江と松花江の合流地点の南西が「東鎮」建設予定地であることに言及することはほとんどなく、合流地点という情報ばかりが繰り返されている。換言すると、非常にぼんやりとした地理的想像力によって、松原市が「東鎮」の建設予定地だったことを強調する言説が横行しているように思われてならないのである。

### 3 『松原日報』における「東鎮」言説の使用状況とその意味

『松原日報』は松原日報社が1994年に発刊を開始した新聞である。『松原市志』によると<sup>49</sup>、



松原市内において最大規模である22000部(2000年現在)を発行し、2015年9月までに5900期あまりを発行している。したがって、近年の松原市の情勢を把握するうえで最適の資料と考えられる。本章では、2007年から2014年までの8年間の『松原日報』において、「東鎮」および「孫中山」に関連する言説がどのような意味で用いられているかを明らかにし、現在の松原市における「東鎮」言説の実態に迫りたい。

今回分析に用いたのは、『松原日報』の電子版『松原日報数字報』<sup>50</sup>である。電子版は2007年以降しか収録されていないという制約があるものの、全文検索することが可能であり、8年間の同紙の中で「東鎮」という言説がどのように用いられたのかを正確に知ることができるメリットがある。「東鎮」というキーワードで検索してみたところ、前章で言及した「東鎮」を冠する地名(東鎮大路や東鎮広場)や施設名(東鎮国際城)、インターネット上でのニュースサイト名(東鎮網)などを含む記事が多くヒットした。しかし、これらの記事で用いられている「東鎮」には、地名や施設名などを表す記号以外の意味はない。したがって、ここでは「東鎮」と「孫中山」をキーワードとして記事を抽出し、その結果を文末の表1にまとめた。

表1を見ると、「東鎮」は新聞の第1面(01:頭版)に登場する例が多いことが分かる。記載内容は、歴史を紹介する言説と、都市インフラ整備に関する言説という大きく2つに分類することができる。以下では、それぞれの言説の内容について詳しく見ていきたい。

まず、松原市の歴史を紹介する言説は、例え

ば、中央電視台の撮影チームが松原市を訪問した際に、当時の松原市委員会書記であった藍軍が歓迎の意を表明したという2007年8月21日(番号1、タイトル:中国中央電視台の撮影チームが我が市に到着)の記事に見られる。松原市の歴史を語る際に「東鎮」について、「松原の歴史は悠久で、文化は燦爛としており、歴史が古い一方で、年齢の若い都市である。孫中山先生の著書である『建国方略』の中では、以前から東北三江の交流地点の一つの「東鎮」という都市を建設するという構想がなされた」と述べられている。他にも、例えば番号7、9、17、22、23、25などの記事では、松原市は「東鎮」に加えて遼金や女真、扶余、渤海国の発祥および発展の地として語られ、歴史的な側面を強調することが多いという特徴が読み取れる。

次に、都市インフラ整備に関する言説を見てみよう。2010年11月15日の記事(番号19、タイトル:市委副書記の王常松が末端組織を調査 民生に注目 市の状況を把握)では、ハダ山水利事業に関連させて、孫文が『建国方略』にて構想した都市インフラが着実に整えられているという記述が見られる。「市委委員会、市政府の大きな支持の下、そして、松原市民の弛まない努力のもと、その構想は実現しつつあるのである」というように、インフラ整備が孫文の構想したコンテキストで進んでいることを強調する内容が多い。都市外のインフラ整備と孫文『建国方略』を関連付ける言説も確認できる。例えば、2008年7月14日の記事(番号5、タイトル:我が市の上半期における経済発展の総量が急増、第三産業、外国貿易輸出は加速し、吉林省一位 松原は科学的発展の軌道へ)では、

孫文の『建国方略』に触れながら、「松原大橋、松肇高速道路、大広高速道路など松原に重点を置いた建設が進められている。松陶鉄路、松原飛行場の項目は前期工程が順調に進められている」と述べている。

これら2つの言説に共通するのは、松原市の歴史や都市インフラ整備の進行を権威づけ、正当化するために、どちらも都市のアイデンティティを「東鎮」に見出しているということであろう。では、なぜ架空の計画に終わった「東鎮」に、そのアイデンティティを見出す必要があるのだろうか。新聞資料からだけではそれを読み取ることは難しいが、一つには、松原市の歴史の短さが関連していると考えられる。2008年7月28日の記事（番号9、タイトル：都市文化と人文精神を通して自己を表現）では、オリンピックの聖火の通過に際して、どのように松原市をアピールするのかについて記述している。その中で「東鎮」は松原市を代表する歴史的遺産として語られるのだが、「我們松原尽管建市只有16年、但却并不乏豐厚的文化遺產（我々の松原市は16年の歴史しかないが、しかしその豊富な文化遺産は貧相ではない）」という記述からは、新興都市である松原市のアイデンティティを「東鎮」に求めようとしていることが読み取れる。このように、松原市においては、新興都市ゆえの数少ない歴史的要素として、「孫中山先生が『建国方略』の中で述べた東鎮」という事実が重要性を帯びているのではないだろうか。

## おわりに

本稿は、吉林省松原市が孫文『建国方略』で構想された「東鎮」に都市のアイデンティティを求める言説（「東鎮」言説）に注目し、出現時期とその理由、そして言説に込められた意味を明らかにしようとしたものであった。ここで前章まで論じてきたことをもう一度確認しておこう。

孫文『建国方略』には、嫩江と松花江の合流地点の南西に水陸交通の一大結節点となる「東鎮」という新都市を建設する、という構想が記されていた。しかも、『建国方略』は孫文死後も国民政府が国家建設を進めるうえで依拠すべきテキストの一つと位置づけられた。ところが、『建国方略』以後の「東鎮」建設予定地には、大都市もクモの巣状の鉄道路線も実際に建設されることはなく、「東鎮」構想は架空の計画に終わった。

それに対し、現在の松原市中心部を構成する扶余と前郭は、松花江の南北に位置する双子都市として成長していき、しだいに一体化の動きが見られるようになった。ただ、松原市誕生まではあくまで別の行政体であり、それぞれの地方志類などを調べてみても「東鎮」言説が用いられている例は確認できない。扶余では、地理的位置が「東鎮」建設予定地とは異なるし、モンゴル族自治州である前郭では、「東鎮」にアイデンティティを求める必要性がなかったのである。

松花江の南北に広がる一体の空間を創出した1992年6月の松原市誕生は、「東鎮」建設予定地との矛盾を解消し、「東鎮」言説が出現

する条件が整ったことを意味した。ところが、「東鎮」言説は1990年代には確認できず、市誕生10周年に当たる2002年に初めて出現した。その直接の理由は、2001年に中央電子台で放送されたテレビドラマと孫文故居と中山影視城への訪問によって、松原市の幹部たちが孫文の『建国方略』の価値を認識したことにあると考えられる。また、2002年から活発になった市政府主導による不動産開発と販売も、「東鎮」言説が出現したもう一つの理由であると考えられる。

「東鎮」言説に共通するのは、第一に、松原市が孫文の「東鎮」構想が現実になったものと位置づけ、市の歴史や都市インフラ整備を権威づけ、正当化する意味で使用されていることである。第二に、その反面、地理的位置については非常にぼんやりとした形でしか言及されていないことである。このように、歴史が短い新興都市であるがゆえに、松原市は孫文の「東鎮」に都市のアイデンティティを求めていると考えられるのである。

以上が前章までで論じてきたことである。ここから、松原市にとっての「東鎮」とは、ミンカのいう「非現前の地理」に通じるものがあると言えはしないだろうか。たしかに、トリエステは長い歴史の中で集団によって創り上げられたイメージを、松原市は孫文という特定の個人が特定の年代に抱いたイメージを都市のアイデンティティとしているわけであり、両都市にとって「非現前」が意味するところもまた同一とみなすことはできない。とはいえ、「存在しえたが、一度も存在せず、将来も存在しないであろう何ものか」という「非現前の地理」が、都

市のアイデンティティの根幹を形成するものとして機能しているという点では、両都市には共通するものがある。

「東鎮」言説の出現時期とその理由、ならびに使用状況を調べると、松原市が「非現前の地理」としての「東鎮」に都市のアイデンティティを求めることにより、市の歴史や都市インフラ整備を権威づけ、正当化するという構造が垣間見えてくる。松原市にとっての「東鎮」言説とは、使用するだけで孫文のお墨付きが得られるという、きわめて都合の良いものであり、それゆえその価値を認識すると直ちに積極的に使用するようになっただけの代物ではないのか。だからこそ、地理的位置については曖昧模糊とした形でしか言及されないのではないのか。そのように考えることもできるだろう。したがって、本稿のように「東鎮」言説と真面目に向き合おうとすることは、さして意味のないことではないのかという見方もあるかもしれない。

しかしながら、2013年に現地でフィールド調査を行った筆者らは異なる見解を持っている。すなわち、「東鎮」はたしかに「非現前の地理」ではある。おそらく将来もここに孫文が構想したような交通の一大結節点となる大都市が建設されることはないであろう。そういう意味で、「東鎮」は永遠に「非現前」なままである可能性が高い。とはいえ、孫文『建国方略』の一節が刻まれた松原市規画展覧館前のモニュメント、ならびに東鎮大路、東鎮広場、東鎮国際城、東鎮賓館などの建造物という形で、また、地方志類や『松原日報』などにおいて日々いろいろな言説が生産され続けているという形で、現在の松原市では「非現前の地理」であるはずの「東

鎮」が人々の前に「現前」している事実がある。したがって、たとえ政治的な意図が込められたものであるにしても、現在の松原市では「東鎮」という「非現前の地理」が、現実の空間に影響を及ぼし始めているし、ある意味ではすでに一種の文化としての形を持っていると言うことができよう。このことが、筆者らがフィールドワークを通して感じ取ったことであり、また「非現前の地理」を考えるうえで重要なことだと考えられる。

そう考えるならば、「東鎮」のような「非現前の地理」、あるいは地理的想像力と向き合うことも決して必要のないことではない。むしろ、「非現前の地理」が都市のアイデンティティとなったり、現実の空間に及ぼす力について、孫文の『建国方略』の事例に限らず、考察を深めていく必要があるだろう。今後の課題としたい。

[本稿の出発点となったフィールド調査は、科学研究費基盤研究 (B)「中国東北における地域構造の変化に関する地理学的調査研究」(研究課題番号 24401035) のサポートを受けて行った。代表者である小島泰雄先生をはじめ、フィールド調査でお世話になった日中双方の先生方に感謝の意を表したい。文章は第 3 章を石田が、残りの部分を柴田がそれぞれ担当した。図表の作成者は各箇所記した。]

柴田陽一 (SHIBATA Yoichi, 京都大学人文科学研究所産官学連携研究員)

石田曜 (ISHIDA Yo, 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)

## 註

1 研究課題番号 24401035。詳細については <https://kaken.nii.ac.jp/d/p/24401035.ja.html> を参照。現在までに 2 冊の報告書を刊行している。小島泰雄編『中国東北における地域構造変化の地理学的研究—長春調査報告—』京都大学人間・環境学研究科地域空間論分野、2013 年 (<http://hdl.handle.net/2433/179530>) ; 同編『中国東北における地域構造変化の地理学的研究—松原調査報告—』京都大学人間・環境学研究科地域空間論分野、2015 年 (<http://hdl.handle.net/2433/197306>、以下「小島前掲報告書」と略記する)。

2 参加者の一人である松村は勤務校 (阪南大学) のホームページ上で、自身の行ったフィールド調査について紹介している。松村嘉久「もう一つの松原市でのフィールドワーク」松ゼミ Walker vol.125、2013 年 9 月 25 日 (<http://www.hannan-u.ac.jp/doctor/tourism/matsumura/mrrf430000015u5i.html>)。

3 「乍浦港」百度百科 (<http://baike.baidu.com/view/1409358.htm>)。

4 「曹妃甸港」百度百科 (<http://baike.baidu.com/view/414464.htm>)。

5 「三峡水电站」百度百科 (<http://baike.baidu.com/view/51765.htm>)。

6 クラウディオ・ミンカ (山崎孝史ほか訳)「トリエステ人」とその非現前の地理』『空間・社会・地理思想』第 16 号、2013 年、111-127 頁。[Claudio Minca, “‘Trieste Nazione’ and its geographies of absence,” *Social & Cultural Geography* 10-3, 2009, pp. 257-277.]

7 孫文「建国方略」中山大学歴史系孫中山研究室・広東省社会科学院歴史研究室・中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室合編『孫中山全集』第 6 巻、

- 中華書局、1983年、157-493頁。内訳は「建国方略之一 孫文学說一行易知難（心理建設）」が157-246頁、「建国方略之二 実業計画（物質建設）」が247-411頁、「建国方略之三 民権初歩（社会建設）」が412-493頁である。底本には1922年6月に上海民智書局から刊行された再版を利用している。
- 8 『実業計画』については、次の文献の第3章・第4章を参照した。武上真理子『科学の人・孫文—思想史的考察—』現代中国地域研究叢書6、勁草書房、2014年、85-133頁。
- 9 武上、前掲書、86頁。
- 10 孫文、前掲書、253-267頁。
- 11 孫文、前掲書、267-301頁。
- 12 孫文、前掲書、301-336頁。
- 13 孫文、前掲書、336-377頁。
- 14 孫文、前掲書、377-389頁。
- 15 孫文、前掲書、389-394頁。武上によると、第四計画の初出は*Far Eastern Review* および『建設』誌ともに1920年である。武上、前掲書、90-91頁。
- 16 孫文、前掲書、351-361頁。
- 17 孫文、前掲書、351-352頁。
- 18 孫文、前掲書、352-356頁。
- 19 孫文、前掲書、264-265頁。
- 20 扶余とその旧称である伯都訥については、次の文献に詳しい。秋山元秀「草原から現代都市へ—中国吉林省松原市の成立—」小島前掲報告書、2015年、23-27頁。
- 21 欧陽纓編『表解説明 中華析類分省図』亜新地学社、1929年7月。
- 22 石川禎浩「死後の孫文—遺書と記念週—」『東洋学報』（京都）第79冊、2006年、6頁。
- 23 井内弘文「孫文実業計画の歴史的意義とその実現過程」『三重大学学芸学部教育研究所研究紀要』第9集、1953年、45頁。
- 24 井内、前掲論文、46頁。
- 25 井内、前掲論文、46頁。
- 26 阿汝汗主編『松原文化述略』時代文芸出版社、2009年、42-44頁。
- 27 武上、前掲書、86頁。
- 28 染木煦『北満民具採訪手記』座右宝刊行会、1941年、280-283頁。
- 29 松原市扶余区史志工作委员会編『扶余県志』吉林人民出版社、1993年、291頁。なお、『松原市志』によると、1.47億元を投じた拡張工事が1993年に完了したようである。松原市地方志編纂委員会編『松原市志』吉林省地方志叢書54、吉林人民出版社、2006年、361頁。
- 30 小野寺淳「中国における資源開発と都市形成—吉林油田を事例に—」小島前掲報告書、2015年、8-9頁。吉林油田を中心として形成された松原市の都市生活の実態については、次の文献を参照。石田曜「吉林省松原市の都市公園・広場にみるレジャー空間の特性」小島前掲報告書、2015年、36-46頁；柴田陽一「吉林省松原市における小学校通学区域の変化と学校間格差」小島前掲報告書、2015年、47-59頁。
- 31 陳相偉・李殿福主編『扶余県文物志』内部資料、1982年；扶余県地名委員会弁公室編『吉林省扶余県地名志』内部資料、1984年；前郭爾羅斯蒙古族自治県地名委員会編『前郭爾羅斯蒙古族自治県地名志』内部資料、1989年；中国人民政治協商会議吉林省前郭爾羅斯蒙古族自治県委員会文史資料委員会編『駿馬奔馳 前郭文史資料第9輯 前郭爾羅斯蒙古族自治県成立35周年專輯』内部資料、1991年；前郭爾羅斯蒙古族自治県地方志編纂委員会編『前郭爾羅斯蒙古族自治県志』遼寧民族出版社、1993年；松原市扶余区史志工作委员会編『扶余県志』吉林人民出版社、1993年。
- 32 「扶余市」「前郭爾羅斯蒙古族自治県」《吉林省》

- 編纂委員会編『中華人民共和国地名詞典』商務印書館、1994年、208-216頁、228-236頁。
- 33 現在の前郭県におけるモンゴル文化伝承の実態については次の文献を参照。高橋健太郎「吉林省松原市前ゴルロスモンゴル族自治州における馬頭琴音楽の普及と無形文化遺産代表リストへの登録」小島前掲報告書、2015年、81-83頁。
- 34 松原市人民政府弁公室・松原市史志弁公室編『松原年鑑 1992-1995』吉林文史出版社、1996年；松原市人民政府弁公室・松原市史志弁公室編『松原年鑑 1996・1997』松原市地方志和《松原年鑑》編纂委員会、1999年。
- 35 「松原市」崔乃夫主編『中華人民共和国地名大詞典』商務印書館、1998年、1095-1108頁。
- 36 劉秉生「前言」劉秉生主編『松原市情』中共松原市委宣傳部、2002年、1頁。
- 37 「孫鴻志」百度百科 (<http://baike.baidu.com/view/1874879.htm>)。
- 38 孫鴻志「序言」松原市地方志編纂委員会編、前掲書、巻頭。
- 39 吉林省基礎地理信息中心編『新板 吉林省城市地圖系列 松原』哈爾濱地圖出版社、2011年。
- 40 「東鎮国際城」百度百科 (<http://baike.baidu.com/view/2495802.htm>)。
- 41 『東鎮網』(<http://www.sydzw.com.cn/>)。
- 42 張笑天「孫中山先生失落的夢」張笑天『心靈車站』吉林人民出版社、2004年、143-144頁。
- 43 「高広濱」百度百科 (<http://baike.baidu.com/view/624644.htm>)。
- 44 「楊紹明同志逝去」(<http://cpc.people.com.cn/n/2015/0228/c87393-26609516.html>)。
- 45 「孫中山」百度百科 ([http://www.docin.com/p-800026091.html](http://baike.baidu.com/link?url=ZDFJKnC3t5gwIy16tAA-QWv4DZEHzL7CDlxRHXAZcmtFvEcBOS0hCXqDoF9UAczE_))。
- 46 中国十大影視城 中山城 HP (<http://www.cctvzsc.com/zh-CN/introduce.html>)。
- 47 「松原市」Wikipedia (中国語版) (<https://zh.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E5%8E%9F%E5%B8%82>)。
- 48 「松原市地産分析報告」(<http://www.docin.com/p-800026091.html>)。
- 49 松原市地方志編纂委員会編、前掲書、885-889頁。
- 50 『松原日報数字報』(<http://0438news.com/syrb/>)。

表1 『松原日報』における主な「東鎮」の記事一覧

番号	年	月	日	タイトル	掲載頁	記載内容の詳細	
						歴史紹介	インフラ整備
1	2007	8	21	中国中央電視台の撮影チームが我が市に到着	01：頭版	○	
2	2008	2	27	ハダ山の思い—ハダ山水利の基幹工事の成功とその着工	05：専版		○
3		3	3	我が市の経済貿易視察団が珠三角へ 南部・広東省の大地での見事な姿	01：頭版	○	
4		6	20	東鎮広場 盛大かつ荘重な始動	01：頭版	○	
5		7	14	我が市の上半期における経済発展の総量が急増、第三産業、外国貿易輸出は加速し、吉林省一位 松原は科学的発展の軌道へ	01：頭版		○
6		7	16	夢を伝える 100年の聖火が燃え上がる新都市 北京オリンピックの松明が松原にて伝達成功	03：オリンピック前奏	○	
7		7	18	松原における産業の優勢は明白 投資の潜在力は巨大	01：頭版	○	
8		7	28	ロマンの旅—「祥雲」の吹く松原—オリンピック聖火伝達の日々を回顧	01：頭版	○	
9		7	28	都市文化と人文精神を通して自己を表現	03：総合	○	
10		8	6	歓喜の中で松原の躍動が話題に—全国の主流メディアに松原市民のオリンピック聖火伝達に関する熱い議論が取り上げられる	01：頭版	○	
11		9	2	韓国江原道青年代表団が松原を訪問	01：頭版	○	
12		9	28	東鎮大路が奇跡を起こす	01：頭版		○
13	2009	2	12	孫鴻志が中小企業の発展促進の視察団団員に面会	01：頭版	○	
14		7	8	魅力ある松原 齊魯を感じる—我が市の党政代表団が済南を訪れ招商を視察	01：頭版	○	
15		10	10	万緑叢中花正紅（辺り一面の草むらにあって、なお花は紅い）—我が市における「中国優秀観光城市」を創建する任務の記述	01：頭版	○	
16	2010	3	8	北国の新興都市が江南の古都の解放思想と連携 大業の達成を謀議 我が市は南京にて27億元を約定	01：頭版	○	
17		4	15	文化の力で松原の魅力描く 文学の夢を表現—「威仕萊」杯の「松原文化を誇る 文学の夢に乘せて」を主題とする作文コンクール優秀作品を掲載	03：総合	○	
18		7	13	松原港を北方の大港として建造	01：頭版		○
19		11	15	市委副書記の王常松が末端組織を調査 民生に注目 市の状況を把握	01：頭版		○
20	2011	2	23	一本の橋 六つの街道	04：文芸副刊	○	
21		9	7	科学的に発展 「三化」に希望を載せる 推進を強化 松原には幸福を—市委副書記王常松が新華網の生放送中に単独インタビューを受ける	01：頭版	○	
22		9	11	谷志和が松原市に來訪する台北市福建省同安同郷会メンバーに面会	02：松原新聞	○	
23		10	24	切実な願い 深情を込めて—全国政治協協会會議副主席の李金華による松原市考察における記録	01：頭版	○	
24		11	1	「東鎮」の源を遡り 幸福の都市をつくる	01：頭版	○	
25	2012	6	13	松原の記憶 松原の輝き 松原の希望 展覽館に展示する松原の昔 今そして将来 本紙ガイドが館内を案内	01：頭版	○	
26		6	21	台湾商界代表の來訪 台湾・松原 第1回經濟貿易交流會メディアに登場	01：頭版	○	
27		7	6	大きく強い文化を持つ松原の名刺を作る	01：頭版	○	
28		11	7	松嫩明珠が追い抜く	01：頭版	○	

注1) タイトルは石田が日本語訳したものである。

注2) 頁数は、『松原日報数字報』に記載される頁割りをそのまま使用した。